

その 32

万葉ファンタジア（特別篇）

「後宮の歌語り」



処女等乎 袖振山 水垣乃 久時由 念来吾等者

をとめ そでふるやま あれ
「娘子らが 袖振山の 水垣の 久しき時ゆ 思ひき吾は」

（乙女が袖を振るといふ布留山の神垣のように、久しい間思ってきたのだよ、わたしは）

柿本人麻呂（巻 11・2415）

未通女等之 袖振山乃 水垣之 久時従 憶寸吾者

をとめ そでふるやま われ
「娘子らを 袖布留山の 水垣の 久しき時ゆ 思ひけり吾は」

（乙女に袖を振るといふ布留山の神垣のように、久しい間思っていたのだよ、わたしは）

柿本人麻呂（巻 4・501）

前回紹介した『万葉幻視考』の第2章「歌語りは存在する」の中で、「後宮の歌語り——王朝文学に連なる相聞の系譜」として、詩人でもある万葉学者大浜巖比古氏は、ある歌物語を幻視して、1篇のドラマを創作している。そもそも「万葉鎮魂論」や「幻視の手法」は、国文学者の折口信夫氏の論証に触発されて着想したことを、大浜氏は書いている。折口氏は、大浜氏と同じく、歌人、詩人でもあり、釈道空しゃく ちようくうという号を持っていることはよく知られるところである。折口氏もまた、数は少ないが、万葉歌からドラマ仕立ての物語を書き下ろしている。現代では、万葉学者の上野誠氏も万葉朗読劇や万葉オペラなどの脚本を執筆、万葉集の舞台化に取り組んでいる。かくのごとく、他にもその例はあるが、今回は、『万葉幻思考』の中に唯一残された、大浜氏の創作ドラマを、「万葉ファンタジア」（特別篇）として、そのまま転載、紹介する。

ドラマの舞台は後宮。後宮とは、内裏の中で皇后や妃などが住む宮殿のことで、ここに居住し、天皇や皇后に奉仕する女官、采女なども含めていう。采女は、天皇や皇后の身の周りの世話をするだけではなく、天皇の妻妾としての役割を果たすことも多く、諸国から見目麗しい美女が献上されることが多かったという。

采女の歌という、(その29)「戦場の万葉集」で紹介した、^{さののおとがみのおとめ なかとみのやかもち}狭野弟上娘子と中臣宅守の相聞歌が思い起こされる。狭野弟上娘子は、後宮の下級の采女だったが、一説によると禁断の恋の掟を破り、中臣宅守と情を通じたことがばれて、宅守は罪人として越前に配流となる。互いを想い合う切ない相聞歌 63 首が、万葉集に残された。

かくのごとく、後宮の采女たちは、天皇以外の男たちと意思を通じることは禁じられていた。美しき采女たちは、その熱い胸の空白を埋めるために、彼女たちに人気の宮廷歌人柿本人麻呂に声をかけ、その恋歌を聞くことで慰めとした物語を、大浜氏は幻視した。

大浜氏を「天成の詩人」と呼んだ哲学者梅原猛氏は、大浜氏の「幻視」について、「われわれもまたその幻を見ることによってそういう歌語りに参加出来る」として、次のように書いている。

＜この詩人にして学者である大浜氏の語った歌語りは、限りなく清明であり、そしてそこには何人によっても語られなかった『万葉集』の歌についての鋭い直観が秘められている。しばらくこの歌語りを静かに聞いて、このあまりにも詩人の魂を持ちすぎた 1 人の学者の冥福を祈ろうではないか＞ (P5～6)

それでは、大浜巖彦作「万葉ファンタジア」(特別篇)「後宮の歌語り」の幕を、大浜氏の冥福を祈りながら上げよう。

歌語りの世界を具体的に描いてみよう。わが幻視の世界に人麻呂と後宮の采女^{うねめ}がうかびあがる。

非番の采女たちのたまり場である。彼女たちも適当な話題がなく、めいめいぼんやりしている。

采女 A 人麻呂さまをよんで、なにかききましょうよ。

采女 B さあ、いま身体があいてらっしゃるかしら。

(こういう後宮などで、歌、歌語り、歌物語りによって、彼女たちを慰めるのも、宮廷歌人の裏芸ともいうべき職能であった。それは慰めるだけでなく、諸国から上って来たおとめ達のみやこぶりの教養の場でもあった。そのことは後でのべる。)

(人麻呂、よばれて登場)

人麻呂 また歌がたりのおねだりですか。

若い采女 ええ、恋の、すばらしい恋のを。

(人麻呂、年長の采女に視線を向ける。年長の采女、黙ってうなづく)

人麻呂 (ややあってウタいだす)

をとめらが そでふるやまの みづがきの ひさしきときゆ おもひきあれは

(采女たち、きき入る。年長の采女、眼を閉じて、なにか遠い想いを追う様子)

とりわけ美しい采女 ああ、この歌、わたし 1 度ここできいたことあるわ、ねえ。

若い采女 あら、わたしはじめてよ、いい歌だわ。

年長の采女 え、いい歌って？ほんとにわかるかしら。

若い采女 まあ、恋の歌ですもの、わかりますわ。

年長の采女 いえねえ、あなたまだ若いでしょ、これは老いらくの恋の歌なのよ。

美しい采女 思い出しましたわ、この歌きいたのは、わたしがここに上ってまもない頃でしたわねえ。

人麻呂 （ゆっくりと口をきく）はい、そうですよ。わたくしもよくおぼえておりますよ。あの時のあなたの御様子まで思い出します。めだってお美しかった。

美しい采女 まあ、……でも二番せんじはいやよ。人麻呂さまのは、いつも新しいのが魅力でしょ。この頃あまりいらっしやらないと思ったら、たね切れになったのかしら。

人麻呂 いえ、いえ、今日のはこれで特別に考えたのですよ。特にあなたを見てからウタったのです。前の歌とはちょっと違ってて、実はずいぶん違っているのです。

若い采女 （美しい采女と人麻呂とを見較べながら）アラ、ききずてにならないわ、でも、その歌、どんな歌なの。

（人麻呂ウタおうとするのを、年長の采女、眼で制しておいてウタいだす。声は若い）

をとめらを そでふるやまの みづがきの ひさしきときゆ おもひけりわれは（2度繰りかえす）

（人麻呂それにつづけてウタう。その声ははれの場でウタうはりのある高らかな声とちがう。しっとりとした心に沁みとおるような声だ。——宮廷の女たちにとっては、これも人麻呂の魅力だった）

ちはやぶる かみのもたせる いのちをし たがためにかも ながくほりせむ

人麻呂 あの時は、ずいぶんウタいましたねえ。

美しい采女 ああ、ほんとに思い出しましたわ。わたしあの時はじめて人麻呂さまのお歌をきいたのでしたわ。

人麻呂 そうです。あなたは東国からあがられたばかりで、まだオドオドしていらして……だから大和のふるの里の里歌を、力づける気持でウタってさしあげたのです。

若い采女 まあ、でも、同じ歌じゃないの。どこがちがうのかしら。

年長の采女 だからわかるかしらといったでしょう。そのためにわたしは繰返してウタったのですよ。よくきいていなくちゃだめね。

若い采女 はい。（少ししよげる）

人麻呂 （それを見ながら）では説明してあげましょう。

——初句のところが、はじめにウタった歌はヲトメヲガ、後の方はヲトメヲヲ、ガとヲのちがいがありますね、そこのちがい。次にオモヒキとオモヒケリ、最後にアレハとウレハ。ヲトメヲガソデフルとは、おとめたち

が袖を振っているので、おとめたちだけが、そこには登場している。勿論その相手はおとこでしょうが、その男性は登場していません。あなたがたは、いま袖を振っている^{をとめ}処女たちだけを——単数でもよろしい、自分の恋として考えるとしたら、単数の方がいいでしょう——眼に画いて下さい。その次に、その処女を眺めている男を考えて下さい。袖を振る処女を見ている男——まあわたくしとしましょう。するとわたくしは思いますね、ああ処女が袖を振っている、私も昔は、ああして処女に向って袖を振ったものだ。そこで男、つまりわたくしの眼には、その頃の布留の社のあの瑞垣がありありと浮んでくるのです。そしてそのみずみずしく長くつらなる写象の上に、流れていった時間の久しさが思われてくるのです。あの瑞垣はかわらねど、わが身世に経るという思いです。そして、その久しい間ずっとよくもまああの人のことばかり思いつけて来たことよ、わたくしは、というのがこの歌です。

さきほどおっしゃった老いらくの恋、それも老いに至るまで思いつけて来た、ひとりの男の悲しい片恋い歌なのです。

この頃は漢の文字を使って歌を書きとめるようになりましたね。こういう恋の歌を書きとめるとき。コヒを孤悲（ひとりのコとかなしいのヒ）と書くと、文字の上からでもよくわかりますね。恋とはひとりかなしきもの……

若い采女 あっ、これはやはり人麻呂さまの、御自身の歌なのね。すると……（と年長の采女を、ついで美しい采女に視線を移しながら、小首をかしげて呟く）このなかに……

（それを抑えるようにして人麻呂）

人麻呂 それで、後の歌ですが、これは青春の歌です。1句と2句のところは、前と違って2人の恋人同士ですね。なぜなら、ヲトメヲヲでしょう。「を」というのは、「に向って」という古くからあるやまとことばです。ですからここでははじめから、処女とおとこと、男女2人を眼に浮べなければならないのです。そこは布留の社です。眼の前に青々とした瑞垣があります。それでもなくても青春はみずみずしい生命の満ちあふれた世界ですね。青春と瑞垣とはよくマッチします。その上この歌でたいせつなのは布留の瑞垣であることです。そうです、タマフリをしているのです。益々自分たちの生命の充実をはかって、青春の永続を希っているのです。そうして現在の2人の愛を確認し合い、その確認を歌うことによって、将来をねがっているのです。現在の確認というところがオモヒケリワレハのケリとワレハであらわされているのです。先の歌はオモヒキアレハだったでしょう。だからわたくしが集めて書きとめておいた歌の集には、

処女等乎 袖振山 水垣乃 久時由 念来吾等者 （巻11・2415番の表記）

と書いているのです。今日の歌はさっそく書きとめておくつもりですが、この歌とはよく似ているけれど、ずいぶん違う歌だということのしるべに、まあ、

という風にでも書いておくつもりです。するとずっと後の世になっても、ちょっと注意深い人ならきっと気がついてくれるでしょうから。

さてこれで、愛し合っている2人の過去から現在までの、現在かくあることの確認の、青春の歌、ということはいくつもありましたね。

そしてそれは、みんなに共通の願いをウタった歌でもあるのです。だから皆で声を揃えて祭の場のようなところでウタわれるのです。みんなで働いているとき疲れをいやし、仕事のはかがいにくくするためにウタわれるようになるのです。そして由緒ある布留の歌ということになって、くにくに、ところどころに流れてゆき、またこうしてみなさんのところにもはいつてくるのです。わたくしがあの方を元気づけようとして、あの時ウタったのも、そういうわけだったんです。

若い采女 では、後ののは、青春の歌で、みんなの願いの歌で、タマフリの歌で、先のは、老いらくの歌で、ひとりの歌で、それも悲しい恋の歌で。——そうするとタマシズメの歌ってどういうわけなの？

人麻呂 ええ、そうもいえましょう。こうして皆さんの前でうたっていると、この頃俄かに老いを感じる心のあれがやわらげられるこころがしますから。もっとも、お美しいあなたがたのせいで、いやまだまだ若いんだという気持ちになれば、ここでウタうことだけでもタマフリにもなりましょうが……しかし、もう1つたいせつなことは、みんなの歌とひとりの歌との違いです。これからの歌のこのみはだんだんひとりの歌になってくると思っています。

若い采女 あら、じゃ、これはやっぱり人麻呂さまのひとりの歌だわ。きっと人麻呂さまに、そういう人がおありなんだわ。

人麻呂 (それにはこたえず) ではこれで……。 (と退場)

別の日、若い采女、誰もいないたまり場でひとりウタっている。

をとめらが そでふるやまの……おもひきあれは

(年長の采女が入ってくる)

年長の采女 まあ、若いのに、老いらくの歌をウタっているわ。

若い采女 いえ、ひとりの歌、人麻呂さまの恋の歌。ひとりの時、この歌をウタうとしみじみと悲しくなります。わたし悲しい歌が国にいたときから好きなんです。

年長の采女 人麻呂さまの恋歌。ねえ。(と、なにか遠い想いを追う様子)

また別の日。同じ場所。数人の采女たち。

采女 A なにかウタわない。

若い采女 わたしウタう。人麻呂さまの恋の歌。

をとめらが……

(つづけて采女 B——)

なつのゆく をしかのつもの つかのまも いもがこころを わすれておもへや

(夏野を行く牡鹿の角の、ああ、あのひとつかみほどの中の、ほんのちよつとの間でも、妹の心を忘れて
いることがあるか)

采女 C たまきぬの さみさぬしづみ いへのいもに ものいはずきにて おもひかねつも

(珠衣の、衣ずれのさわさわ、さわさわとした騒がしさもしづまってふと気がつくと、家のものにろくろく口
もきかずに来てしまって、ああ、思いにたえかねるよ)

若い采女 まあ、その歌のどれにもお話があるの？

采女 C もちろんよ、みなあなたのいう「人麻呂さまの恋歌」よ。お仕事すんだらしてあげる。

年長の采女 今の「たまきぬの」の歌に唱和した歌もあります。いつのまにか人麻呂さまの妻の歌だということ
のカタリと共に……。 (采女ウタう)

きみがいへに わがすみさかの いへぢをも われはわすれじ いのちしなずは

(あなたの家にわたしが住む——そのすみ坂の家道をわたしは忘れますまい、生命さえ無事であり
ましたならば……)

年長の采女、ウタうちに、幕。

後宮の采女たちと人麻呂とをとりあげ、巻 11 の古今相聞往来歌と巻 4 の相聞歌 (2415 番と 501 番) の、所謂類歌少異歌というものの似ていて大いに異るところを説きつつ、歌語りの場を、ドラマの形をかりて説明してみた。

地方の豪族クラスから宮廷に上って来た采女たちは、志貴皇子 (? ~ 716) の歌と共に、まことに『万葉』の大宮人を象徴する美しい存在であったかもしれないが、皇族や貴族たちの、はなやかなロマンスに比べて、現実恋することは禁じられ、宮廷歌人のもたらす恋の歌、歌語りを口にするることによって、恋をただ想うことのみ許され、そのよそ目に美しい日々は、その閉ざされた世界の中に、1 日 1 日と消えてゆく、はかないものであった。その美しいはかなさのゆえに、彼女らに歌われた歌、語られた歌は、『万葉』の中でも、すぐれて美しいものであったのであろう。

